

Title	孝標女の和歌：前代新風摂取をめぐって
Sub Title	Waka by Takasue-no-musume : study on her absorption of the new trend in The previous years
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.66, (1994. 7) ,p.23- 39
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0023">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00660001-0023</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 孝標女の和歌

——前代新風撰取をめぐって——

山本令子

菅原孝標女の勅撰入集は、その没後実に一五〇年近くを経た「新古今集」に始まる。すなわち、

あさ緑花もひとつにかすみつつおぼろに見ゆる春の夜の月

(更級六三／新古今五六)

の詠が、新古今の見出した春の朧月夜の情趣を彩る一首として撰入の榮に浴したのである。以後、延べ一四首に上る勅撰入集歌の内には、

思ひしる人に見せばや山ざとの秋のよふかきありあけの月

(更級三七／玉葉六九七では初句あはれしる／新千載集一七八五)

竹の葉のそよぐ夜ごとにねざめしてなにともなきに物ぞかなしき

(更級四〇／続後拾遺集一〇六七)

の如く、中世歌人の賞翫にも充分耐え得たと思われる秀歌が含まれている。

然しながら、従来、彼女の詠歌の質が正面から論じられることはほとんど無く、散文作者としてののみ評価されてきた。さらには否み難く思われる。

そこで、本稿に於いては、孝標女の歌人としての側面に焦点を当て、彼女の和歌の特質を探ると共に、その拠つて来たる処を考えていきたい。

一

さて、孝標女の和歌資料として第一に挙げるべきは、「更級日記」であろう。「更級日記」には計八十八首の和歌が記され、内、彼女自身の詠作は、連歌一首を含む六十五首が収められている。

又、御物本「更級日記」の定家仮名奥書に拠れば、「夜の寢覚」「みつのはままつ」すなわち「浜松中納言物語」、更には散逸ではあるが「みづからくゆる」「朝倉」の四つの物語に就いても又、孝標女作品である可能性が検討されなければならぬ。この定家仮名奥書の所伝を巡っては、様々な角度から、実に多くの研究が重ねられてきた。すなわち、「浜松中納言物語」に就いては、早く、藤岡作太郎<sup>(1)</sup>氏や尾上八郎<sup>(2)</sup>氏に拠って、「更級日記」との共通性が指摘されてきたが、松尾聡<sup>(3)</sup>氏の一連の御論に拠る、夢の質の共通性、可笑味の欠如等の共通性の御指摘に拠って、ほぼ、孝標女の作と決定付けられた観がある。

又、「みづからくゆる」「朝倉」の二作品に就いては、松尾聡<sup>(4)</sup>氏、小木喬<sup>(5)</sup>氏に拠り、肯定論が唱えられてきたが、樋口芳麻呂<sup>(6)</sup>氏の和歌を中心に考察された詳細な御論考に拠り、ゆるぎないものになったといつてよからう。

一方、「夜の寢覚」に就いては、藤田徳太郎<sup>(7)</sup>氏に拠り、文章の感觸の相違が指摘された他、稻賀敬二<sup>(8)</sup>氏の、一般的な語彙に拠る数量的調査や、阪倉篤義<sup>(9)</sup>氏の「候ふ」の用例調査等に拠つても否定的結論が出されるなど、孝標女作説には懐疑的な風潮が永く続いてきた。然しながら、その後、稻賀<sup>(10)</sup>氏も又、孝標女の初恋の男性を彼女の亡姉の夫と想定する

ことに拠り、「夜の寢覚」の人物関係との相似を指摘され、近年では、石川徹<sup>(11)</sup>、鈴木一雄<sup>(12)</sup>の両氏に拠る肯定論が相次ぐなど、一つの転換期を迎えた観がある。

更に、作品の内部徴証として、頗る有力と思われる、作中和歌に着目した御論として、先述の樋口氏の他、増淵恒吉氏<sup>(13)</sup>、武田宗俊氏<sup>(14)</sup>、鈴木弘道氏<sup>(15)</sup>らに拠る御論考があるが、「更級日記」及び四物語所載の和歌には、酷似した表現・発想が度々認められ、定家仮名奥書の所伝は肯定せざるを得ないとされるのである。

以上の様な、現在までの研究成果を踏まえるならば、定家仮名奥書に挙げられた四物語に就いても、孝標女の作品として扱っていくべきではなからうか。そこで、以下では、「更級日記」の他、四物語に就いても、彼女の作品として検討していくこととする。

さて、孝標女の作品の随処には、三代集、「古今和歌六帖」、更には、「源氏物語」を始めとする物語類からの影響を見出すことが出来る。然しながら、歌人の個性がより如実に反映されるのは、私家集和歌との関わりに於いてであろう。一体、彼女はどの様な私家集作品と関わっていたのであろうか。

先年「更級日記」の和歌を検討された佐藤和喜氏<sup>(16)</sup>は、孝標女の歌への執心は、歌合・歌会が活発に催されていた時代状況に対応するものであり、「その歌においても、当時の新傾向を示すものが多く、能因や六人党をはじめ、同時代歌人との影響関係を指摘し得るものも少なくない。」とされた。確かに、氏の指摘された事項の内、「相対化の傾向」（たとえば「都と山里あるいは他処を相対させる姿勢」）や「構成的な性格」（たとえば「対句的な表現」）、更には、「て」によって上下句を連接する詠法<sup>17</sup>等に同時代性を看取することは、異存のないところであろう。然しながら、歌語等のレベルに於いては、とりたてて「同時代歌人との影響関係」を想定すべき例はさほど見当たらない様に思われるのであ

る。そして、むしろ、氏が拾遺歌人藤原道信からの影響を指摘された、次の例などが興味深く思われる。すなわち、「更級日記」の六十八番歌、

あふさかの関のせき風ふくこゑはむかしききしにかはらざりけり

は、明らかに、書陵部本「道信集」の五十四番歌、

あふさかのせきのせきかせ身にしめてとりのなたてにねをぞなきつる

(榑原本・松平文庫本では第三句身にしみて)

の上二句を踏まえて詠まれたものとされるのである。

そこで、「更級日記」のみならず、孝標女の作品に就いて広く見ていきたい。初めに、佐藤氏が想定された如き、同時代歌人との影響関係が窺われる例を挙げる。

まず、「浜松中納言物語」の巻五には、周防内侍詠に拠る引歌表現が見られ、「浜松」の成立年代を論じる上で、注目されてきた。

ほかの事は忘れはて、「なきにはえこそ」とぞおほえける。

(浜松巻五)

ちぎりしにあらぬつらさもあふことのなきにはえこそうらみざりけれ

(周防内侍集五〇／後拾遺集七六五)

又、「浜松」の二番歌、

虫の音も花の匂ひも風のおとも見し世の秋にかはらざりけり

は、寛弘二(一〇〇五)年頃の詠出と推定される「能因集」<sup>17)</sup>の六番歌、

虫の音も月のひかりも風のおともわが恋ますは秋にぞありける

との関連が注目されよう。更に、「浜松」の二二一番歌、

むすびける契りはことにありけるをこのよかの世とたのみけるかな

には、「このよかの世」という珍しい表現が見受けられるが、これは、「相模集」四二一番歌、走湯百首の内、権現に仮託した夫公資の作かと云われる第二の百首の一首、

あはれびに又あはれびをそへたらばこのよかのよに思ひわすれじ  
に拠ったものと思われる。

さて、以上の三例に留まるかと思われる同時代歌人との交渉に比して、より顕著に認められるのは、先述の道信をも含めた前代歌人からの影響である。中でも、曾禰好忠、和泉式部からの影響は頻繁に見受けられ、今、総てを挙げる事は出来ないが、そのごく一部を示すこととしたい。すなわち、次の様な引歌が既に先学諸注に拠って指摘されている。五月二十日の月いと明う、ここかしこの木の下こ暗う、夕まぐれならねど、もの恐ろしきまで見えわたるに……

(寝覚卷四)

ひくるればしたばこぐらきこのもののおそろしきなつのゆふぐれ

(好忠集一一九)

昔より今にとり集めて、「なれる我が身」と言ひ顔にあれど、……

(寝覚卷四)

なにのためなれるわが身といひがほにやくとも物のなげかしきかな

(和泉集三〇五／三八七)

又、「浜松」の六番歌、

誰により涙の海に身を沈めしほるあまとなりぬとか知る

に見られる、涙の海に沈むという表現は、「好忠集」四四一番歌、

ひとこふるなみだのうみにしづみつつ水のあはとぞおもひきえぬる  
に抛つたものと見做すことが出来るのではなからうか。

更に、「更級日記」の七十番歌、

おく山の紅葉のにしきほかよりもいかにしぐれてふかくそめけむ

は、堤中納言藤原兼輔の二男清正の、

しぐるればいろまさりけりおくやまのもみぢのにしきぬればぬれなん  
という歌に、その表現・発想を仰いだものと考えられよう。

(清正集三五)

又、「寢覚」の二十六番歌、中の君が父入道の許に迎え取られたことを聞いた男君が彼女に送った歌、

おもふらむ憂さにもまさるいとだにつげで入りにし人のつらさは  
は、藤原高遠から送られた、

(高遠集一四二)

に對する公任の返歌、

いとだにつげでやまべにいるひとはこひしきこともあらじと思ふ  
を踏まえたものと思われる。

(高遠集一四三)

更に、「寢覚」の末尾欠巻部の歌、

うき世には我すみ佗びぬ郭公しでの山ちのしるべやはせぬ

(風葉集一一八五)

には、郭公に死出の山路の道しるべをさせるといふ表現・発想が見えるが、こういった趣向は、源兼澄の、

なくこゑはおとらぬものをほととぎすしでのやまちのみちしるべせよ

(兼澄集九六)

という一首を除けば、待賢門院堀河の、

此世にてかたらひおかんほととぎすしでの山ちのしるべともなれ

(新後撰集一五五六／玉葉集二八〇九／山家集七五〇)

に至るまで見当たらない様であり、兼澄詠との関連が想定されよう。

さて、以上の様な、様々な前代歌人詠との関わりの意味するところを考えるにあたって興味深く思われるのが、次の例である。すなわち、「寢覚」の一五番歌、

立ちよればいはうつなみのをのれのみくだけでものぞかなしかりける

が、百人一首でも周知の源重之詠、

かぜをいたみいはうつなみのおのれのみくだけでものおもふころかな

(重之集三〇三／詞花集二一一)

を本歌としていることは、先学諸注御指摘の通りであるが、ここで注目したいのは次の一群の和歌の存在である。

やまがつのほてにかりほすむぎのほのくだけでものおもふころかな

(好忠集一三五)

ゝ なにかはかひの あるべきを くだけでものを おもふらんゝ

(蜻蛉日記一三六)

よしのがはおのがみのあわにあらねども岩うつ波はいかがくだくる

(和泉集七四九)

等の歌々と考え合わせるに、「寢覚」一五番歌も又、重之詠享受圏の拡がりの中で捉えるべきものと思われるのである。それは、いわゆる河原院新風の享受圏に他ならない訳であるが、顧みるに、先述の、清正、公任、兼澄と云った歌人達も又、河原院を中核とする新風の試みを積極的に取入れようとした人物であったと云えよう。孝標女作品には、この

様な新風の影響が色濃く窺われるのであり、彼女の歌の新しさは、同時代との影響関係に拠ってというよりはむしろ、前代歌人詠の享受に拠って支えられていたと考えられるのである。

二

それでは、この様な傾向は、果たして彼女個人の特質と云い得るのであろうか。或いは、同時代に広く見られる傾向である可能性も無いとは云えまい。そこで、まずは、孝標女とほぼ同時代の物語作者、六条齋院宣旨の詠歌を取り上げることとし、彼女の和歌資料として、歌合に於ける詠及び「狭衣物語」の作中和歌・引歌表現を検討してみたい。孝標女の仕えた祐子内親王の妹に当たる六条齋院、禊子内親王の許に出仕した宣旨は、禊子主催の歌合の多くに出詠し、その女房名からも、齋院女房の内重きを成していることが窺われるなど、同じ受領層出身とは云え、里がちで埋もれた観のある孝標女とは対照的と云ってよいかと思われる。

宣旨の兄もしくは弟には、和歌六人党の一人として名高い源頼実がいるが、永承六（二〇五一）年の齋院歌合に於ける宣旨の詠、

みるほどもそらにかすみのへだつればひかりにあかぬ春の夜の月

（永承六年正月八日庚申六条齋院禊子内親王歌合三一・かすみへだつる月）

は、頼実の、

くもりなきそらもかすみにかすみつつひかりにあかぬはるの夜の月

（故侍中左金吾集七・春の夜の月）

と、下二句を完全に共有している。右の宣旨詠に遡ること七年、寛弘元（一〇四四）年に頼実は卒していることから、

宣旨が頼実詠に学んだものと見做せよう。

さて、その宣旨にも、孝標女同様、好忠・和泉からの影響が認められる。例えば、「狭衣」の巻一、筑紫行きの船に乗せられた飛鳥井姫君に道成が見せた狭衣下賜の扇は

……、真名仮名など書きませたまへるを見れば、「渡る舟人かぢを絶え」など、かえすがえす書かれたるは、……と描写され、その扇を見た姫君は、

楫緒絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人

(狭衣三五)

と詠ずることとなる。これは、諸注指摘の如く、好忠の、

ゆらのとをわたるふな人かぢをたえ行へもしらぬこひのみちかな

(好忠集四一〇)

に拠ったものであるが、と同時に姫君の歌の涙の海に沈むと云う表現には、先述の「浜松」六番歌同様、「好忠集」四四一番歌の影響を見るべきではなからうか。

又、「狭衣」一〇八番歌、

暗きより暗きにまどふ死出の山三瀬川にや待ちわたるらん

は、「拾遺集」に入集した和泉の有名な歌、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月 (和泉集一五〇／八三四・拾遺集一三四二)

の存在を抜きにして考えることは出来ない。

然しながら、好忠・和泉を除く前代歌人詠との関わりは、孝標女の場合とはかなり異なった様相を呈している。何よりも特徴的なのは、実方詠の積極的取り入れであろう。「狭衣」巻一の冒頭、狭衣の恋い焦がれる様の描写、

……、よしなしごとにより、さばかりめでたき御身を、「室の八島の煙ならでは」とおぼしこがるるさまぞ、いと心苦しきや。

或いは、

いかばかり思ひこがれて年経やと室の八島の煙にも問へ

(狭衣一六)

といった歌が、実方の、

いかでかはおもひありとはしらすべきむろのやしまのけぶりならでは

(実方集九〇・小大君集八〇・三奏本金葉集三七八・詞花集一八八)

に拠っていること、同じく卷一の、

……、岩間の水つつぶつと聞こえたまふべき人間のほどだにぞ、さらにありがたかりける。

が、

ものをだにはまの水つつぶつといはばやゆかむおもふころのを踏まえていることは、もはや定説と云って差し支えないであろうが、

(実方集一〇〇)

残りなくうきめかづきし里のあまを今くり返し何うらむらん

(狭衣一三四)

に見える、里のあまと云う珍しい表現にも、

うら風になびきにけりなさとあまのたくものけぶりこころよわさは

(実方集一五七／異本系実方集六八・後拾遺集七〇六)

さとのあまのなびくけぶりもなきものをきみがたものぬれぎぬかもし

(異本系実方集六九 小弁)

という贈答との関連を想定出来ないであろうか。

ただ、宣旨が実方の詠草と如何様に関わったかは定かでなく、実方からの影響の色濃さが何を意味するかは明らかでない。

その他、「狭衣」巻二に於いて、順詠の引歌が一箇所指摘されている。

「沸きかへり氷の下にむせびつつさも侘びさする吉野川かな 上はつれなく」など口ずさみつつ、……

ひをさむみ氷もとけぬ池なれやうへはつれなきふかきわがこひ

(順集二八)

然しながら、宣旨には、孝標女にはあまり見ることの出来なかつた、同時代歌人からの影響が顕著に窺われることを看過してはならないであろう。たとえば、「狭衣」の六番歌、

思ひつついはかき沼の菖蒲草みごもりながら朽ちやはてなん

が、岩垣沼の菖蒲草を取り上げた背景としては、宣旨自身も出詠した、天喜三年五月三日の六条齋院物語歌合の席上で(19)の小弁の歌、

ひきすつるいはかきぬまのあやめぐさ思ひしらずもけふにあふかな (六条齋院物語歌合二二／後拾遺集八七五)

の存在が挙げられており、「狭衣」の成立に於いてこの物語歌合が重要な役割を果たしたことも又、指摘(20)されている。

又、その歌人的地位から指導的立場に在ったと考えられる、伊勢大輔、相模の両名に学んだと思われる例も見受けられる。すなわち、「狭衣」の一八九番歌、

語らば神も聞くらんほととぎす思はん限り声な惜しみそ

は、「相模集」の一五番歌、

かたらはばをしみなはてそほとときすききながらだにあかぬこゑをば  
を踏まえたものと思われ、広川女王の、

(古今六帖一四二一／万葉集六九七)

恋草をちからぐるまに七車つみてもあまるわがこころかな  
に扱ったとされる、「狭衣」の一八九番歌、

七車積むともつきじ思ふにも言ふにもあまるわが恋草は

は又、伊勢大輔の、

思ふにも言ふにもあまる事なれやころもの玉のあらはるるひは

(流布本伊勢大輔集九七／後拾遺集一〇二八)

の上二句を用いたものと見做せよう。

更に、いわゆる頼通的世界を構成したと思われるサロン、すなわち、頼通、寛子、祐子、禊子、師房、内裏、後宮等  
のサロンに於ける歌合に参加した女房歌人達の詠を検討してみると、孝標女に見られた様な前代からの影響は稀と云つ  
て良く、同時代的な影響関係のみが色濃く窺われることに気付く。

たとえば、永承五(一〇五〇)年二月の齋院歌合に於ける、祝題の武蔵の歌、

ゆくそらもなくなくかへるかりがねのはのみやこやたちうかるらむ(永承五年二月三日庚申六条齋院歌合一二)

は、その上三句を、長久二(一〇四二)年二月の弘徽殿女御歌合の「かへるかり」題の伊勢大輔詠、

ゆくそらもなくなくかへるかりがねのきこえぬほどになりけるかな(長久二年二月二日弘徽殿女御歌合一)

に扱ったものと思われる。又、天喜四(一〇五六)年の皇后宮春秋歌合に於ける内侍の詠、

みな人の心をかけてくる物はきしになみよるあをやぎのいと(天喜四年四月卅日皇后宮寛子春秋歌合一五・柳)

などは、治暦三（一〇六七）年三月の備中守歌合に於ける成助の詠、

みる人はきしになみよる青柳の糸に心をかけてこそくれ  
（治暦三年三月一五日備中守定綱歌合一七・岸柳）

に影響を与えたことが窺われよう。

無論、伊勢大輔、相模の両名に就いては、その歌集を繙けば、河原院周辺の新風の試みの影響が散見することであるが、それに就いては、今は措くこととしたい。ごく平均的な女房歌人達の歌には、同時代的な影響関係のみが色濃いためであり、伊勢大輔、相模は傑出した先輩歌人として仰がれる存在であったかと思われるのである。これは、先述の宣旨の詠歌にも通ずる傾向であり、孝標女の和歌とは異なつた感触を免れ得ないであろう。

### 三

以上考察してきたところに拠れば、孝標女の同時代との没交渉性とは裏腹の、河原院を中核とする前代新風和歌への親近性は、彼女の特質と見做して良いかと思われるが、それでは、一体、こうした特質は何に由来するのであろうか。

そこで、次の様な歌に注目してみたい。たとえば、「浜松」の九十九番歌には床の浦という歌枕が詠み込まれている。うべこそは急ぎ立ちけれ床の浦の波のよるべはなかりけりやは

床の浦自体は、他にも用例がない訳ではない。<sup>(22)</sup>然しながら、床の浦の波を詠んだものとしては、「蜻蛉日記」に収められた道綱母詠、

われもさぞのどけきとこのうらならでかへるなみちはあやしかりけり  
（蜻蛉日記九七）

及び、それを踏まえての兼家詠、

あさましやのどかにたのむとこのうらをうちかへしけるなみの心よ

(蜻蛉日記一六六)

の二首以外には見当たらないようである。

又、「朝倉」の歌、

時鳥ことかたらひし君ならでしのびもあへずなきわたるかな

(風葉集六二〇)

は、「蜻蛉日記」の兼家詠、

おとにのみきけばかなしなほととぎすことかたらはんとおもふこころあり

(蜻蛉日記一)

並びに、道綱詠、

うちとけてけふだにきかんほととぎすしのびもあへぬときはきにけり

(蜻蛉日記二一二)

の表現を学んだものと思われ、「寢覚」末尾欠巻部の歌、

かけてだに思ひやはせし山ふかくいりあひのかねにねをそへんとは

(無名草子五三)

は、「蜻蛉日記」の道綱母詠、

かけてだに思はざりきや程もなくかかる夢路に惑ふべしとは

(蜻蛉日記一六七)

に表現・発想を仰いだものと考えられるのである。

「更級日記」作者は「蜻蛉日記」を読み、その影響を受けたであろうことが指摘されている。<sup>(23)</sup>従って、先述の和歌に

於ける類似も又、「蜻蛉日記」の撰取・享受と見做すことが出来よう。

尚、伯父長能の詠に拠ったと思われる例も一例ながら見受けられる。「更級日記」の三十二番歌、

みやこにはまつらむものを郭公けふ日ねもすになきくらすかな

は、「長能集」の一八八番歌、

みやこにはまつらんものをほとぎすすさめぬ草のやどにしもなく

(長能集三では第二句まつ人あらん)

と上三句を共有しているのである。

既に、諸氏に拠って指摘されてきた様に、道綱母には好忠の影響が顕著に見受けられる。その生涯を家刀自として過ごした彼女に河原院周辺の新風を齎したのは長能を措いては考えられまい。

孝標女に就いても、同様の事情を推察するのである。彼女も又、祐子内親王家女房とは云いながら、ほとんど出仕することもなく家刀自の生涯を過ごし、現存する歌合類への出詠も確認し得ない有様である。その様な彼女の歌風形成にあたっては、秀れた歌人を輩出した母方の家の果たした役割が大きかったのではなからうか。無論、道綱母は彼女が生ずる以前に此世を去ったと思われ、長能も又、彼女のごく幼少時に没したものと考えられる。然しながら、遺された歌稿・歌集等を介して、彼らの詠作に親しみ、河原院を中心とする新風の試みに接することは、充分可能であったと云えよう。

尚、父方の家からの影響に就いては、「寢覚」に於いて、道真詠に拠る引歌表現が二箇所指摘されているに留まる様である。父孝標、兄定義等は、詩文の道はともかくも、和歌に於いては達者とも見えず、孝標女の導きになったとは到底考えられない。やはり、母方の血筋を重く見るべきではなからうか。

## 注

和歌の引用は、新編国歌大観及び私家集大成に拠ったが、私に清濁を改めた箇所がある。又、「夜の寢覚」は日本古典

- 文学全集の、「浜松中納言物語」は日本古典文学大系の、「狭衣物語」は日本古典集成の本文を各々用いた。
- (1) 『国文学全史 平安朝篇』(東京開成館・明治三十八年)
  - (2) 『校註日本文学大系 二』(昭和二年)
  - (3) 『浜松中納言物語末巻略考』(『国語と国文学』・昭和六年四月)、「更級浜松寝覚に描かれたる可笑味に就いて」(『国語と国文学』・昭和十年八月)など。
  - (4) 『平安時代物語の研究』(東宝書房・昭和三十年)
  - (5) 『散逸物語の研究 平安鎌倉時代編』(笠間書院・昭和四十八年)
  - (6) 『「みづからくゆる」物語考』(『愛知教育大学国語国文学報』・昭和五十四年一月)、「『朝倉』物語考」(『平安後期―物語と歴史物語』・中古文学研究会編―笠間書院・昭和五十七年)共に『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(ひたく書房・昭和五十七年)に所収。
  - (7) 『夜の寝覚物語について』(『校註夜半の寝覚』・中興館・昭和八年)
  - (8) 『形式的処理による一つの場合 寝覚浜松に関して』(『国語と国文学』・昭和二十五年十二月)
  - (9) 『夜の寝覚』の文章』(『国語と国文学』昭和三十九年十月)
  - (10) 『孝標女の初恋の人は「雫に濁る人」か』(『国語と国文学』・昭和四十三年十二月)
  - (11) 『夜半の寝覚は孝標女の作と思う』(『帝京大学文学部紀要』・昭和五十六年三月)、『王朝小説論』・新典社・平成四年に所収)、『校註夜半の寝覚』解説(武蔵野書院・昭和五十六年)
  - (12) 『夜の寝覚』と『更級日記』の作者』(『平安時代の和歌と物語』・桜楓社・昭和五十八年)
  - (13) 『浜松中納言物語と寝覚物語』(『日本文学講座 物語小説編(上)』・改造社・昭和九年)
  - (14) 『更級日記』・『浜松中納言物語』・『夜の寝覚』・「あさくら」・「自らくゆる」の中の歌の関連について』(『福島大学学芸学部論集』・昭和三十三年三月)
  - (15) 『寝覚・浜松の歌と菅原孝標女の歌との比較』(『寝覚物語の基礎的研究』・塙書房)
  - (16) 『更級日記歌の位相』(『国語と国文学』・昭和六十年四月)
  - (17) 犬養廉氏「能因法師研究(二)―青年期の周辺―」(『国語国文研究』・昭和四十一年九月)に拠る。

- (18) 石川徹氏「夜半の寢覚」出典考」(『帝京大学文学部紀要』・昭和六十年十月／前掲『王朝小説論』に所収)に詳しい。
- (19) 神野藤昭夫氏「散逸物語『岩垣沼の中將』の復原とその物語史的位相」(『源氏物語と平安文学 第三集』・早稲田大学大学院中古文学研究会編・平成五年五月)
- (20) 久下晴康氏「平安後期物語の研究 狭衣浜松」第二章(新典社・昭和五十九年)
- (21) 和田律子氏「祐子内親王家のサロン形成―菅原孝標女物語作家説考究のために―」(『立教大学日本文学』・昭和五十二年十二月)に拠る。
- (22) 大斎院御集一六八／相模集五九三／後拾遺集八一四(相模)
- (23) 伊藤博氏「蜻蛉日記の日記文学史的位置」(『蜻蛉日記研究序説』・笠間書院・昭和五十一年)、中野幸一氏「蜻蛉日記の享受と影響」、森本元子氏「蜻蛉日記の女流文学史的位置」(共に「一冊の講座 蜻蛉日記」・有精堂・昭和五十六年に所収)
- (24) 石川徹氏「校注夜半の寢覚」、「夜半の寢覚」出典考」(共に前掲)

〔付記〕本稿は、平成五年十月の中古文学会秋季大会に於ける口頭発表に基づくものである。席上、御教示を頂いた石川徹先生をはじめ諸先生方に心より御礼申し上げる。